イタドリ葉「外商元年に」

高知市の企業 健康効果ＰＲ 売り込み再開

県産品開発・販売の「アミノエース」（高知市大津乙）がイタドリの葉の健康効果に着目し、県外への販売拡大に取り組んでいる。脂肪燃焼効果が期待できるポリフェノールを多く含むことから、4年前にイタドリ葉茶を商品化。新型コロナで売り込みが停滞したものの、高知県立大の協力で研究を続け、大腸がん細胞の増殖を抑制することが新たに分かったという。「2024年こそ外商元年に」と張り切っている。

健康効果が注目されているイタドリの葉（高知市内）

アミノエースは2006年に、県食品工業団地の企業などが設立。交流会「アミノ会」を開いてアイデアを出し合い、コラボ商品などを世に出してきた。16年からイタドリの商品性に着目し、高知市や生産者とともに増産や販促に取り組んでいる。

18年、県立大健康栄養学部の渡辺浩幸教授（63）に栄養成分の解析を依頼。すると、イタドリの葉にはポリフェノールの一種「ネオクロロゲン酸」がニラの55倍、ホウレンソウの3500倍も含まれることが分かり、19年12月にイタドリ葉茶を作った。

しかし、販路を広げようとした矢先にコロナ感染が拡大。展示会が中止か試食なしになる中、同社の川村志朗さん（48）は「できることをやるしかない」、渡辺教授も「有効利用につなげないともったいない」と研究を深めてきた。ネオクロロゲン酸はがんを抑制するという先行研究があり、「イタドリ葉にも同様の効果がある」と仮説を立てて実証を試みた。

乾燥させた葉をエタノールの中ですりつぶし、遠心分離して抽出物を作成。マウスの大腸がん細胞に添加して変化や生存率を観察した。その結果、抽出物を加えたがん細胞は、何も加えない細胞に比べて生存率が低かった。細胞が自ら死ぬ「アポトーシス」を引き起こす酵素のカスパーゼも1・56倍活性化したという。

渡辺教授らの論文は23年1月に学術誌に掲載され、アミノエースはがん細胞を抑制する組成物として特許を出願した。

同社は費用面などから特定保健用食品や機能性表示食品化は見送ったため、葉茶の効能としてはうたえない。ただ、葉の抽出物の実験結果はＰＲできる。

イタドリは食用にする地域が高知以外ではほとんどない。川村さんは「3年の空白で県外知名度がコロナ前に戻った。23年も展示会に2カ所行ったけど、『鳥の仲間じゃありません』ってとこから説明が必要で、取引につなげられなかった」と苦笑する。

24年は、2月に千葉県で開かれる「スーパーマーケット・トレードショー」を皮切りに県外販売に力を入れる方針。県立大は食用にする茎の部分の健康効果も調べる。同社の竹村元伸専務（51）は「イタドリは高知が誇る山菜。魅力を広く知らせ、今年こそ県外取引を始めたい」と意気込む。

イタドリは栽培条件や品種により、健康成分の量や皮のむきやすさなどが違うという。イタドリを20年ほど栽培する農事組合法人梅ノ木ファーム（高知市）の川崎文雄さん（71）は「食べる用とお茶用とに分けて栽培したらいいかもしれない。生産者の高齢化も進んでおり盛り上がればうれしい」と期待を寄せている。

（竹内悠理菜）

2024年1月4日（木） 高知新聞掲載記事